



高崎人

NPO法人ソフトボール・ドリーム
理事長

宇津木 妙子^{さん}

ソフトボールの夢を世界に

2020年に開催される東京オリンピックの追加種目の中に野球・ソフトボールが選ばれ、ピックアップカメラ高崎と太陽誘電の強豪2チームを擁する「ソフトボールのまち高崎」の市民にも大きな喜びとなった。

2012年開催のロンドンオリンピックから、ソフトボールが除外されて以降、宇津木妙子さんは、復活に向けて国内外を精力的に動いた。「追加種目の候補に選ばれたことは本当にうれしい。IOCで正式に決めていただけるよう、がんばっていききたい」と気持ちを引き締めている。

昭和61年に日立高崎ソフトボール部の監督に就任。その後、日本代表ソフトボールチームを率いて「宇津木ジャパン」と呼ばれ、2000年のシドニーで銀、次のアテネで銅メダルを獲得した。オープンカーで市街をパレードし、沿道につめかけた市民から大拍手を受けたことは今でも忘れない。

速射ノックの鬼コーチと呼ばれ、厳しいことで有名な宇津木さん。「強い思いで目標に向かって、けっしてあきらめない」と語る。笑顔は包み込むような大きな力を感じさせ、「この人についていきたい」と惹かれるのは、選手だけではない。

ソフトボールがオリンピック種目から除外された直後、福島に招かれ中学生に講演をした時だ。一人の女子生徒が「ソフトボールでオリンピック選手になりたいんです」と手を上げた。子どもたちの気持ちが氣力を失いかけた宇津木さんを揺り動かした。「子どもたちに夢を失わせてはいけない」と、宇津木さんは決意し、国内はもとよりヨーロッパ、アフリカなど世界各国で子どもたちにソフトボールを教えている。

高崎に来てから約30年。「地域の応援でここまで来られた。ご恩返しをしていきたい」と感謝の気持ちでいっぱいだ。「ソフトボールがあるから今がある。自分にできることを精一杯続けていきたい」と今日も忙しく世界を飛び回る。

■宇津木 妙子さん（うつぎ たえこ）

昭和28年生まれ。NPO法人ソフトボール・ドリーム理事長。ピックアップカメラ女子ソフトボール高崎シニアアドバイザー。東京国際大学女子ソフトボール部総監督。国際ソフトボール連盟（ISF）殿堂入り。ソフトボールを通じて子どもたちの人間教育を実践している。速射ノックのパワーを維持するため、多忙ながら毎日2時間半のトレーニングを欠かさないそうだ。NPOでは東日本大震災の東北被災3県での復興支援活動を継続している。